未来動物園

ゆるる

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

動物が大好きな人間。

それ故に、人間は大きな過ちを犯す。

目次

第一話 ―― 1
第二話 ―― 3
第三話 ―― 6
第四話 ―― 9
第五話 ―― 11
第六話 ―― 13
第七話 ―― 16
第八話 ―― 19
第九話 ―― 23
第十話 ―― 26
第十一話 ―― 29
第十二話「おーぷん」 ―― 31
第十三話「ふおん」 ―― 34
第十四話「けんきゅうじょ」 ―― 37

第一話

人間は動物が大好きだ。動物を可愛がるのが好き、動物の仕草が好き、動物を飼うのが好き。

人間（ヒト）にとって癒しであり、時には慰めになる動物。しかし、この動物たちを巡って歴史に残る大事故が起こる事など、誰も考えることはなかった。

２１ｘｘ年、東京の土曜日。人々が、日頃の学校や仕事による疲れを癒すつかの間の休日だ。その方法は十人十色、ゲームをする者や読書をする者、体を動かす者、それぞれがそれぞれの方法で疲れを癒す。しかし、そんな中一際賑わいを見せている場所が存在した。そう、「動物園」だ。

動物園は２０５０年頃から需要が大きく落ち、多くの園が閉鎖した。しかし、ここ近年の絶大な動物ブームにより動物園の復活を求める声が高まり、今動物園は過去最大の盛り上がりを見せている。

人々は動物の一挙一動を眺めその逞しさ、あるいは優雅さに見とれている。その群衆の中に、未来（ミライ）という一人の少女も居た。未来は根っからの動物好きで、毎日動物園に通うほどだった。勿論将来の夢は動物園で働くこと、毎日決まって学校終わりに動物園に来ては動物たちのスケッチを取りながら動物たちを見つていた。閉園時間ギリギリまで動物園に居座る未来に両親も困惑していたが、本人の夢中な事には全力で取り組ませたいという願いから見逃していたのだ。

沢山いる動物の中でも特に未来が気に入ってたのはネコ科の動物、サーバルキャットだ。

サーバルキャットは基本的にはアフリカの、サバンナと言われる地域に過ごしている動物だ。未来はそんなサーバルキャットを格別気に入っていたのだ。

やがて閉園時間になり、心残りがありながらも仕方なく帰路に就く。動物園から家までは徒歩１０分、だからこそこんな時間まで動物園に居残ることができたのだ。

家に帰ってまず向かうのは自分の部屋、描いてきたスケッチを取り

出しアルバムに挟む。このアルバムは未来の宝物になっていた。
　そして課題をする前にひと段落、未来はテレビを点けた。まず目に見えたのはニュース番組、そんな番組に興味はないのでチャンネルを回そうとしたその時、テレビから手を止めざるを得ないワードが聞こえてきた。
「次のニュースです、桜企画はこの動物ブームに伴い新たな動物園の建設に取り掛かる事を明らかにしました。」
　桜企画と言えば某ＴＤランドやＵ○Ｊ等の人気アミューズメントパークを次々と生み出してきた超一流企業だ。そんな企業が今更動物園なんて・・・　いや、今だからこそなのかもしれない。
　未来はテレビを真剣な眼差しで見つめる。
「なお、新たに建設される動物園は「ジャパリパーク」という名称が採用されることが既に決まっており、桜企画曰く「ジャパンとサファリ、日本を代表する革新的な動物園になる」とのことです。以上、ニュースでした」
　未来はすぐさまパソコンを開き「ジャパリパーク」で検索をかける。未完成ではあるものの公式ＨＰも作られており、現実的な計画であることが分かった。と同時に完成予定が丁度一年後であることも記されていた。
　大人気ＳＮＳ、ｔｗｅｔｔｒｉではトレンド上位三位を「ジャパリパーク」「動物園」「桜企画」が占めている。こんな世の中では当然だろう。
　パソコンを閉じた未来は決意を固める。
「私、ここで働く！」

第二話

「私、ここで働く！」

元々動物園で働くと心に決めていた未来にとって、「ジャパリパーク」という新しい動物園で働くこと、それは絶対に達成したい目標となった。

しかし、今と同じ生活をしていて動物園で働ける訳がない。動物園で働くのには知識も多く必要だ。

未来は動物園に行きたい気持ちを抑え、「動物園で働ければ毎日動物と、今よりもっと身近に触れ合えるんだ！」と自分に言い聞かせ、毎日勉強に勤しんだ。

その間も動物ブームは全く衰えず、むしろ加速していったのだった。

そして、気付ばあっという間に発表から一年を迎えようとしていた。

大学を卒業し、新社会人となった未来はノートパソコンを開く。一年前のあの日の自分と重なった。

ジャパリパークで検索をかけ、公式ＨＰを開く。

前とは変わらず、準備中のままだが右下に「正社員募集」と付け加えられていた。未来はそれをクリックし、応募フォームに名前や電話番号、自己ＰＲなどを書き込む。自己ＰＲは一瞬手が止まったが、正直に自分が動物をどれだけ好きなのか、赤裸々に綴ることにした。

少し緊張したまま、送信ボタンにカーソルを合わせ、思い切ってクリックする。やがて送信完了、と画面に表示され無事に動物園への応募が完了したことを確認し、パソコンをそっと閉じた。

一週間後、未来の自宅へ一通の封筒が届いた。封筒には「ジャパリパーク人事部」の文字、間違いなく一次審査の結果だ。

恐る恐るテープを剥がし、中身を取り出し文字を読む。

そこには「一次審査通過」の文字。

勿論喜びたいのは山々だったが、あくまでもこれは一次審査で、ジャパリパークで働くにはあと二つの審査を潜り抜けなければなら

ない。動物園で働く上で必要な情報を持ち合わせているかを問う筆記試験、そして何より大事な面接試験だ。
未来はそれに向けて、また毎日勉強や面接練習に勤しむのだった。
そして一か月後、筆記試験の日を迎えた。
試験官の「始め」の声とともにすぐさま問題を開く。が、そこで未来は絶句することになる。
殆どの問題が、予習してきた問題の類似問題だったからだ。驚きつつも未来は問題を解き続け、終了15分前には周りより一足早く終わっていた。
そして一週間後、また封筒で合否の通知書が届く。今回の筆記試験はかなり自信があったが、前回の一次試験とは大きく違い、そう簡単に合格するものでもない。「もしかしたら落ちてるかも…」と思いながらも封筒を開ける。
そこには「二次審査通過」の文字。
未来は大きく声をあげ喜んだ、そして封筒を自分の部屋へ持っていこうと持ち上げたその時、封筒からもう一枚の紙が落ちてきた。
通知書に気を取られて気づかなかったのだ。
その紙を拾って文章を読む。そこには驚くべき内容が記されていた。
「筆記試験において得点上位三位の者は面接を控除する。」
つまり、筆記試験で高得点だった者は面接無しで合格、という訳だ。
「そうなのか。」と軽く受け流しつつも文章にもう一度目をやる。
「なおその三名にのみ、この面接控除に関するお知らせを同封しております。この紙を受け取った上でジャパリパークで働く意思のある者ののみ以下の電話番号に電話してください。」
一瞬思考回路が停止する。頭の中で自問自答を繰り返す。、
「これってつまり… 私… 合格?」
やっと自分の中で結論が出た、が突然のことに頭が追い付かない。
特に喜びもないまま無意識に紙に書かれていた電話番号へ電話をかける。
3コールもしないうちに相手は電話に出る。

「はい、ジャパリパーク人事部です。」
まだ驚きを隠せないながらもイメージダウンだけは避けたいため声は自然と普通に戻った。
「突然お電話してしまい申し訳ありません。先週二次審査を受けて、今日その結果が返ってきたんですが、合否通知書と一緒に面接控除に関するお知らせみたいのが送られてきたんですけど、これってどういう事なのでしょうか？」
未来がそう言うと、相手は急に事務的な口調から人間としての純粋な口調に切り替わる。
「〇月〇日、〇〇区〇〇〇〇にある桜企画ジャパリパーク運営部までお越しください。よろしくお願いします。」
そう伝えられ、電話は切られた。
相手が言っていた住所を忘れないうちに未来は急いでメモを取る。
未来はようやく頭が現在の状況に追い付いた。
するとさっきまで抑えられていた喜びが一気に爆発する。
そしてもう一度通知書を手に取った。
「私、ここで働けるんだ！」

第三話

戸惑いを隠せない気持ちと、念願のジャパリパークで働けるという気持ちが混ざり合った複雑な心境の中、未来は電話で伝えられた住所へと向かう。

やがて目の前に現れたのは如何にも「都内」と感じさせられる立派な高層ビルだった。

見たこともないほど奇麗な内装に気を取られつつも未来はエレベーターへと足を進める。

やがてエレベーターは一階へ到着し、未来はそれに乗り込んだ。電話で伝えられた場所である最上階へと向かうボタンを押すとドアが閉まる。

目にも止まらぬ速さで動き出した階数表示にこれまた未来が驚いているとエレベーターはあっという間に最上階へと到着した。

ドアが開いたその先に見えたのは「ジャパリパーク運営部」の文字。

恐る恐るドアに近づき「コンコン」と二回ノックする。

すると中からは「どうぞ」の声。

未来は「失礼します」と言うと共に思い切ってドアを開いた。

入ってまず目に飛び込んできたのはポップな文字で書かれた「ようこそジャパリパークへ！」の文字と可愛いらしい動物の擬人化イラスト。

奥には沢山の事務机とパソコンや椅子、そして社員らしき人の数々。

私が唖然としていると横から声が聞こえてくる。

「こちらへどうぞ」と秘書らしき格好の女性が私を招いていた。

招かれたその先は個室になっており、もう一度「失礼します」の声とともにドアを開けた。

中に入ると大きな机を囲んでソファーが二つ。応接室の用だった。

促されて未来はソファーに座る。向かい側には若い男性が一人座っていた。

未来が自己紹介をしようとしたその時、男性が先に話し始めた。

「初めまして、私はジャパリパーク運営部代表の新良（にいら）仁（ひとし）と申します。貴方の事は人事部から聞いております。唐突で申し訳ありませんが・・・ ここで働く意思はありますか？」

そう聞かれると未来は食い気味に「もちろんです！」と答える。

すると新良は傍に置いてあったフォルダーから一枚の紙を取り出した。

「契約書です。内容を良く読んでからサインをお願いします。」

それは労働契約書だった。内容に落とし穴が無いか一応しっかりと確認する。

未来は契約書に度々出てきた「フレンズ」とのワードに違和感を覚えたが、元々「革新的な動物園」と告知されていたこともあり、質問することなく契約書にサインをした。

「これで私は・・・ ジャパリパークで働けるんですよね・・・・ ？」

未来は当たり前のことを新良に尋ねる。

新良は一瞬不思議そうな表情を見せたが、すぐに元の表情に戻し「はい、もちろんです。」と答えた。

未来がホッとするのもつかの間、新良は再び口を開いた。

「ジャパリパークの開園はまだ先です。今日から数えて三日後に全従業員の選定が終了します。そして来週から一週間、社員研修を行います。その前にまた、もう一度連絡をしますので今日はもうお帰りになられても大丈夫ですよ」

その言葉を聞いて未来は「分かりました、ありがとうございます！」と答え、「いえいえ」と笑顔で見送る新良を後目に「失礼します」とその場を立ち去った。

再び家に帰るために未来はエレベーターの一階へと向かうボタンを押す。

ドアが開き未来は乗り込んだ。

そしてやっと「ジャパリパークで働く」という事を本格的に実感した。それと同時にこれまでの苦労と努力も一気に実感し、改めて自分を褒めちぎりたい気分になった。

やがてエレベーターは一階へと到着する。

エレベーターの移動時間は行きよりも長く感じられた。
再び奇麗な内装に目をやってから未来はビルを出る。
そしてビルの最上階を眺めたのだった。

第四話

数日後、未来の携帯に一件の着信が入る。きっと社員研修の話だろうと、未来はすぐに電話に出た。

「もしもし」と未来が言うと相手は、「新良です。社員研修の件でお電話させて頂きました。」と返してきた。

やっぱりな、と思いながら楽し気な口調で新良に「はい！お願いします！」と返し、耳と肩で携帯を挟みながらメモを準備する。

メモが取れる準備が整ったジャストタイミングで新良は口を開いた。

「三日後、社員研修が始まります。これはまだ絶対に口外しないで欲しいのですが、ジャパリパークは海の孤島です。現地までは船で向かいますので、○○にある○○港に朝１０時を目途に集合して下さい。」

その言葉に未来が「はい！」と相槌を打つと、新良は再び話し始めた。

「服装は自由で構いません。現地で制服に着替えてもらいますので。その他もこちらで用意するので、特に持ち物はありません。」

未来は新良の言うワード一つ一つに胸を躍らせながら「わかりました！」と答えた。

すると新良は「何か質問はありますでしょうか？」と訪ねてきた。

それに対して未来が「特にありません」と答えると、新良は「わかりました。では、よろしくお願いします。」と言い、電話は切られた。

未来は自分だけがジャパリパークの所在地などの秘密の情報を知っていることに益々喜びを感じた。

そして三日後、朝６時にセットしていた目覚まし時計が鳴る。

眠気と戦いつつも未来は目覚まし時計を止めて、起き上がった。

未来の家から伝えられた港までは電車と徒歩で一時間。こんな早く起きる必要はないのだが、もしもの時の為にと真面目な未来ならではの努力だ。

まず向かうのは洗面所、顔を洗って軽く髪を整える。

そして次に向かうのは台所、腹が減っては戦はできぬ。未来は毎日

自分で朝食を作るのだ。
今日のメニューはキャベツの味噌汁とサラダと目玉焼きにベーコンとおにぎり。至って普通の食事と眠気覚ましのコーヒーを一杯。
食事を終えて時計を見れば、時刻は午前七時。未来は使い終わった食器を洗い、テレビに録画してあった映画を一本見始めた。
そして時間は過ぎ、午前8時３０分。歯を磨いて身だしなみを整えてから未来は家を出た。
最寄りの駅まで三分歩き、電車に乗る。
「まもなく～○○港前～」
到着アナウンスを聞き、未来は電車を降りる。
改札を出て左にまっすぐ進み、港が見えてくる。
時刻は午前9時４０分、丁度いい時間だ。
港を見れば、これからは同僚となる大勢の人々が集まっていた。目の前にはかなり大きな船が停泊している。
そして群衆の前に立っていた新良の元へ向かい「おはようございます」と挨拶をする。すると新良も「おはよう。」と返してから、続けて「船の出航は１０時３０分だ、後五分後には船に入ってもらうよ。」と未来に告げた。
未来は「わかりました！」と返し、その場を後にした。
聳え立つビルの様な大型客船を前に、未来は胸が大きく高鳴っていた。
何故ならこれから念願であった「ジャパリパーク」へ行けるのだから。

第五話

警笛が鳴り、船はジャパリパークへと進み始めた。
出発直前に、二時間ほどの航海になるとの知らせがあったので、未来は船内に備えられている仮眠スペースで睡眠をとることにした。
目が覚めて気づいた時には出航から一時間半が過ぎており、未来は重い腰を上げて甲板へと向かった。海の気持ちい潮風を感じながら、壮大な海を眺める。目の先には大きな島が見えた。これがジャパリパークだろうか。
未来が刻々と迫ってくるジャパリパーク上陸への期待感に胸を躍らせながら海を眺めていると、あっという間に三十分が経ち、船は島の停泊所に碇を沈めた。
アナウンスに従い、未来たちはジャパリパークに上陸する。
降りてすぐ目に見えたのは立派なゲート。某ＴＤＬを想像させるようなものだった。混雑回避の為に受付がいくつも設置されている。
未来たちは、ゲートの横手にある従業員入口から中に通される。
そして、その先にある大きなホールへと案内されたのだ。
「ご自由にお座りください。」と聞き覚えのある声がホールに響く。
その声を聞いて未来たちは当な場所に座り、未来は隣の席の若い同年代の女性に会釈をしてからホール前のマイクスタンドへと注目した。
そして暫くしてホール横から人が現れ、マイクの前へと立った。新良だ。
新良は「コホン」と咳払いをすると明るい口調で話し始めた。
「こんにちは。今日はジャパリパークの従業員となる皆様への職務内容と担当場所等の詳しい説明をしたいと思い、このホールにまずお集まり頂きました。説明を担当します、新良と申します。よろしくお願いします。」
その言葉と同時に、従業員たちは一斉にメモを準備だす。
殆どの人がメモを準備したタイミングで新良が再び話し始める。
その内容は、ジャパリパーク設立への道のりや簡単な概要、園内の

動物やアトラクション等多岐に渡った。新良が話している間も、未来を含め多くの従業員が熱心にメモを取っている。
「さて・・・」と新良が、少し深刻そうな口調に切り替え、話を続けた。
「役職と担当場所を伝える前に、一つ大事なことを伝えなければなりません。これはジャパリパークと言う動物園の一番の特徴です。しかしその反面、今までの皆さんの考えを思い切り覆すような、凄く大きなお知らせです。次の話を聞いてもしも働く気が失せたのなら、解散後に直接伝えに来てください。」
　その言葉に、ホール内ではどよめきが起きた。
　それを遮るように新良が再び口を開く。
「先ほどこのジャパリパークの起案理由を説明したと思いますが、アレは全て真っ赤なウソです。本当の理由はこの島にあります。」
　ホール内の全員が驚いた表情を見せる。そして若干のヤジも聞こえた。しかし新良はそれには動じず話を続ける。
「このパークにはあの山、と呼ばれる大きな山があります。その山は噴火する山なのですが、吹き出てくるのは溶岩でも岩石でもなく、未知数の物質なのです。我々はその物質をサンドスター、と呼んでいます。噴火する時期は不定期で、まだまだ研究が進んでいなお未知の物質なのです。そしてそのサンドスターが、動物の死骸や毛と融合すると、新たな生命体が誕生するのです。我々はそれをフレンズと呼んでいます。」
　次から次へと訳の分からないワードが飛び出てきて、未来だけではなくホールの全員がとまどいの表情を隠せない。
　それを見て新良は「ふぅ・・・」とため息を漏らし、口を開く。
「言葉だけでは分からないでしょう。実際のフレンズを見て頂きたいと思います。」
　全員の視線が新良に集まる。そして新良は、大きな声で叫んだ。
「サーバル、前に出ておいで!!」

第六話

新良の呼びかけと共にステージ横から、ひょいと一人の少女が出てきた。

いや・・・ 一人と呼んでいいのだろうか。と言うのもその少女の見た目は、人間がコスプレした様な見た目だったからだ。

周りが騒然としている中、未来は運営部に入った時に見たポスターをふと思い出した。

そう、あの時に見たポスターに描かれていた擬人化少女とこの少女は瓜二つだったのだ。

するとその少女は口を開く。

「私はサーバルキャットのサーバル！よろしくね！」

場の雰囲気に合わない、楽し気な口調で少女、いやサーバルは自己紹介をした。

すると場の空気を読んで新良が再び口を開く。

「サーバル、下がっていいよ。」

するとサーバルは「はーい！」とこれまた楽し気に返事をして舞台裏へと戻っていった。

少し間が空き、新良がマイクの前へ再び立つ。

「驚かれている方が大半だと思います。当たり前です。ですがさっきのサーバルは人間のコスプレでもなく、人工的な生物でもなく、未知の物質サンドスターと動物との融合によって生まれた新たな生命体なのです。これが、フレンズなのです。パークの中にはサーバルの他にも様々な動物のフレンズが居ます。このジャパリパークは動物と触れ合い、フレンズとも触れ合えるまさに革新的な動物園なのです。」

新良のその言葉に唖然としている人がほとんどだった。

それを見て新良がもう一度マイクに顔を近づける。

「先ほども言ったように、フレンズを見て働く気を失った方も居るでしょう。このホールの横に休憩室があります。今から３０分間休憩の時間を取ります。従業員は全員休憩室に移動するようにしてください。但し、働く気を失った者は除きます。」

その言葉を聞いて大勢の従業員がホールを出ようと席を立ち始める。未来も困惑していたが、勿論ホールを出て休憩室に向かった。
その途中で未来は敢えて振り向かなかったのだ。休憩室に向かう従業員たちもそれは皆、同じであった。
場所は変わり休憩室、従業員たちの中には早速グループを作ってフレンズについて話し合っている者もいた。
未来はその輪には入らず、一人で今起こった出来事を一つ一つ整理していた。
今まで考えていたジャパリパークとは全く違う現実。
自分は本当にここで働いて行けるのか？
心の中での葛藤は続き、結局答えは出るはずもなく休憩は終わった。
ホールに戻ると新良は既にマイク前に立っており、従業員が席に着くのを待っているようだった。
未来が隣を見ると、最初に会釈を交わした女性は居なくなっていた。
周りを見回しても、ポツンポツンと空席が見られた。
従業員が座ったのを確認すると新良は話し始める。
「ここに残っている方は、これから先もジャパリパークで働くことを決心されたと見て、話を続けさせて頂きます。それでは役職と担当について連絡をさせて頂きます。まず初めに、従業員端末をお配りします。」
そう言うと、ホール後ろからあの時運営部に居たスタッフの方々が続々と出てきて、従業員に専用端末を配っていく。
全員に端末が行き届いたことを確認して、新良が再び話を始める。
「その端末はその従業員専用の端末です。皆さんの制服の帽子部分に付いてあるオレンジ色の羽に反応して動作します。因みに青い羽根は、案内ロボットであるラッキービーストの従業員認識用の羽です。皆さんの端末にそれぞれの従業員ｉｄ、担当場所や役職、そしてこの後役職別に集合して頂く場所をお送りしました。それでは、ここで一旦お話は終了とさせて頂きます。自分の役職と担当を確認後、一時間

後までに記載された集合場所へ向かってください。」
そういうと新良は、サーバルと同じように舞台裏へと戻っていった。
未来は早速端末を開き、メッセージボックスを開く。
「従業員ｉｄ　ｎｊｓｂｊｌｂｃｂｏ　担当フレンズ：サーバル　役職：飼育主任」
役職を見て未来は驚く。
こんな自分にこんな重大そうな名前の役職が務まるか、そう思ったが面接をパスして合格した自分に自信をもってここは一度納得することにした。
そして未来は、メッセージに書かれていた集合場所へ向かうのだった。

第七話

メッセージを確認した未来は、途中で見つけた自動販売機で缶コーヒーを買ってから集合場所へと向かう。
そして着いた先にあるドアには「飼育主任室」と書かれていた。
メッセージの内容をもう一度確認し、場所に誤りが無いことを確認してからドアを二回ノックして「失礼します。」と言う。
部屋に入るとそこには誰も居なかった。
奥には高そうな机と椅子、手前には事務机が二卓向かい合わせに並んでおり、それぞれに事務椅子が二脚ずつ置かれていた。
右にはロッカー、左には本棚と簡易ベット。
従業員の部屋としては凄く豪華だった。
未来は他の従業員が来るまで待つことにした。事務椅子に座り、さっき買ったばかりの缶コーヒーの蓋を開ける。
時は変わり集合時間、未来はまだかまだかと他の従業員を待つ。
しかし、１０分待てど２０分待てど従業員は一向に来ない。
３０分経ったところでドアが開いた。
しかしそれは従業員ではなく、運営部の女性スタッフだった。
未来はスタッフに向かって挨拶をしてから尋ねる。
「すみません、私以外の従業員さんが来ないんですが・・・ どうしたんでしょうか？」
するとスタッフは不思議そうな顔をして「何を言ってるの？ここは未来さんの個室よ？」
未来は驚く、それと同時に『こんな豪華な部屋が私の個室?!』と内心喜んだ。
困惑するスタッフに、未来は取り合えず「あっ、そうなんですね！」と返す。
するとスタッフは表情を笑顔にし、再び話し始めた。
「じゃあ、要件を伝えちゃうね。はい、まずこれがカードキー。」
そう言うとスタッフは、名前とｉｄなどが書かれたカードを未来に手渡す。

「今は全室解除してあるけど、この説明が全室で終わった時点で部屋はオートロックされるから。このカードキーで開けて出入りしてね。あと、この部屋やさっきのホールなどがあるこの従業員棟に出入りする時にも必要になるからね。」

未来は「わかりました！」と言って、渡されたカードキーを制服の内ポケットにしまった。

「あとは…　職務内容についてね。ジャパリパークはご存知の通り、新設された新しい動物園だから未来さんの様に新人ながら重役に就いている就いている子が何人か居るの、詳しい仕事はメッセージで送られるからそれを見てね。何か困ったときは私みたいな運営スタッフに聞いてくれれば答えるから、そんなに心配しなくても大丈夫よ。」

スタッフのその言葉を聞いて未来は、意気を込めて「はい、頑張ります！」と答えた。

するとスタッフは安心したような顔で「それじゃあ、メッセージを確認しておいてね。」と言い、ドアを開けて帰っていった。

未来はメッセージがまだ届いてないことを確認すると、荷物の整理を始めた。

机にはパソコンを、本棚には数冊の本を。

そして今まで書き溜めてきたスケッチブックは、大事に机の引き出しへとしまった。

未来が荷物の整理を終えると、端末から着信音の様なものが聞こえる。

端末を見てみると、メッセージが届いていた。

「ジャパリパーク園内の様々な場所に存在する案内ロボット、ラッキービーストとコンタクトを取った上で端末内機能である園内マップを参考に自分の担当フレンズの元へ向かいコンタクトを取ること。なお、従業員棟備品庫内に収納されているラッキービーストに関しては稼働前なので、コンタクトを取ることはできません。期限は今日中、終わり次第各自部屋に戻って待機するように。」

まるでイベントの様な面白い課題だ。

そう、まさに革新的である。未来は、これもれっきとした業務なん

だと思うと笑いが込み上げて仕方がなかった。
未来はまず始めにしなければならない、ラッキービーストとのコンタクトをクリアするために従業員棟の外、つまりパーク園内へ向かうのだった。

第八話

未来は従業員棟を後にし、大きなゲートをくぐり園内へと入っていった。

ジャパリパークは「じゃんぐるちほー」「さばんなちほー」など、現実世界の様々な地域を真似た区画ごとに分けられており、フレンズや動物は自分に合った気候のちほーで暮らしている。

つまり、実際はサバンナに生息するサーバルに会うには、さばんなちほーへ向かえばいいのだ。

未来は端末を取り出し、地図を開く。

さばんなちほーはゲートから最も近いちほーだが、歩きで行くには少し時間がかかる。

しかしそれは「お客様」の話であって、従業員には従業員専用の通路が準備されていたのだ。

未来は地図内の「従業員通路入り口」に目的地をセットし、移動を始めた。

するとその時、端末から合成音声が聞こえた。

「チョットマッテ、モヨリノラッキービーストガムカッテルヨ」

ラッキービーストと聞いて未来はこれは好都合だ、と待つことにした。

どんな外見なのだろうか、声はどんな感じなのか、未来が想像を膨らませているうちに時間は過ぎた。

そして未来の後ろから声が聞こえる。

「ハジメマシテ、ボクハラッキービーストダヨ、ヨロシクネ」

その声はさっき聞いた合成音声と同じだった。

未来が振り返ると、そこにはマスコットキャラの様な白と青色の体をしていて、立った耳をしていて、何とも言えぬ愛らしさを持った小さいロボットが立っていた。

これがラッキービーストなのか！と未来が興奮しているとラッキービーストの目が光りだし、また話し始める。

「ジュウギョウインフェザーヲニンシキ、パークガイドケンゲンヲフ

ヨ、ミライ、ヨロシクネ」
それを聞いて未来は、思わず抱きしめたくなる気持ちを抑えてラッキービーストに尋ねる。
「さばんなちほーまで案内して欲しいんだけど、大丈夫かな？」
するとラッキービーストはすぐに返事を返してきた。
「サバンナチホーダネ、サイタンルートヲケンサクチュウ・・・ ケンサクチュウ・・・」
そう言うとラッキービーストは未来の周りをくるくると回るように歩き始めた。
やがてそれは止まり、ラッキービーストは未来に向かって話す。
「ココカラダト、ジュウギョウインツウロカラバス二ノッテイクノガハヤイネ、サッソクイコウカ」
そういうとラッキービーストは歩き出し、地下にある従業員通路へと向かった。
ピョコピョコと歩くラッキービーストも可愛いなぁ、と思いながら未来はそのあとをついていった。
やがて目の前には、サファリバス・・・ いや、ジャパリバスが現れる。
ラッキービーストは運転席に座ると、「セキニスワッテネ」と未来に座るよう促した。
未来はそれに従い、後部座席へと座る。
従業員通路は地下にあるので、日の光が入らない。
その為、ジャパリバスはライトを点けてゆっくりと走り出した。
やがて、見ていても変わらない窓の景色にも飽きた未来は、ラッキービーストに話しかける。
いや、話しかけようとしたその時「ドン」と鈍い音がしたと思うと、直後に大きな揺れが未来を襲う。
前方に体を打った未来は、多少の痛みを我慢してバスから降りる。
見てみればバスは、カーブを曲がり切れず路側帯を超えて、壁に衝突していた。
当のラッキービーストは「アワワワワ・・・・」と言ったままフリーズしたままだ。

未来は運営部へ連絡を入れようと端末を取り出すが、今居るのは地下通路。案の定圏外だった。
かなり長い時間トンネル内を走っていたように思う。
戻るにしてもラッキービーストはフリーズしたままで、歩きで戻るにも時間がかかりすぎる。
未来は、端末の懐中電灯アプリを起動しそれを頼りに前へと進むことにした。
ラッキービーストをリュックに詰めて。
暫くすると左手に、非常口マークとドアが見えた。
そこには「じゃんぐるちほー　従業員通路」と書かれた看板がかけられている。
何故さばんなちほーより遠いはずのじゃんぐるちほーの入口が先に見つかるのか。
不思議に思った未来は端末を再び取り出して地図を開く。
圏外の為、現在地は表示することができない。
が、その他の機能は普通に使えるのだ。
未来は端末に「じゃんぐるちほー　従業員通路」と入力し、検索をかけた。
すると、今いる場所であるじゃんぐるちほー　従業員通路が表示されたのだ。
未来は表示される地図の範囲を少しずつ広げていき、さばんなちほーへの入り口を調べる。
すると驚きの事実が判明した。
なんとさばんなちほーへの入口は、真反対の方向にあった。
つまりバスは、入口を通り過ぎていたのだ。どうりで先にじゃんぐるちほーへの入口が見つかった訳だ。
すると一瞬、背後からラッキービーストの様な声が聞こえたような気がした。
未来が背後を振り返っても、そこには誰も居ない。
もしかしたら、と思い未来はリュックからラッキービーストを出した。

しかし、ラッキービーストを出してみても相変わらずフリーズしたままで反応はない。が、もう一度思い出してみても、あの声はラッキービーストのモノのような気がしてならなかった。
未来は申し訳ない、と思いながらもラッキービーストを両手で持ち、上下に大きく揺さぶり始めた。
すると・・・
「アワワワワワ」
ラッキービーストは再び声を出したのだった。
まるで死んだ振りでもしていたかの様に。

第九話

聞こえないふりをしていたラッキービーストにあえてそれを言わず、未来は「じゃんぐるちほー」への従業員入口のドアを開けた。
普段使われない場所だからか電灯の類は全くなく、頼りになるのは端末から発せられる光のみだ。
やがて十分も歩くと、出口のドアが見えてきた。
ラッキービーストは目を虹色に輝かせ、何かをしているようだった。
未来が出口の扉を開けると、そこには映画やテレビで見たまんまのジャングルが広がっていた。
正確に言うと、ジャングルを真似たモノだが。
未来がその地に足を踏み入れると、ラッキービーストが何食わぬ顔で未来の前を先導し始める。
「ココヲトオッテイクノガサイタンルートダヨ」
まるで道も間違ってないし、車もぶつけてないような態度を取るラッキービーストに未来は思わず笑いがこぼれる。
「キョウハマダ、オープンマエダカラフレンズガスクナイネ」
それを聞くと未来は、確かに。と周りを見渡して納得した。
正式オープン後にはここがどうなってるのか・・・ 楽しみで仕方がない。
暫く周りの景色を楽しみながら歩いていると、目の前にはまたジャパリバスが現れる。
若干の不安を抱きつつも、先ほどよりも広い道だという事もあり未来はラッキービーストに従ってバスに乗った。
バスの車窓は先ほどの地下道とは打って変わって、見ていて楽しい。大自然を感じられた。
暫くすると、ラッキービーストがバスを止める。
今度は事故は起こして無いようだった。
未来は安心してバスを降り、ラッキービーストの元へ歩いた。
するとラッキービーストは、「ココハ、チホートチホーノサカイメダ

ヨ。サーバルハキョウカイヲコエタスグソコニイルカラ、アルイテイコウカ」
そう言うとラッキービーストもバスを降りて、再び歩き出した。
歩いて暫くすると、「この先さばんなちほー」と書かれた看板が出てきた。
先を見れば、まるで世界が縫い合わせられたかの様に、今いるじゃんぐるちほーとは別世界の場所が見えた。
何とも不思議な光景である。
その光景に未来があっけに取られていると、後ろで「カサッ」と何かが動く音がした。
しかし、未来が振り返ってみてもそこには何も居なかった。
気が付けばラッキービーストが先に進んでいたため、未来は急いでそのあとを追った。
未来がじゃんぐるちほーとさばんなちほーの丁度境目に着くと、その向こう側にはあの時ホールで見たフレンズ、いや、サーバルが見えた。
木の上でごろんと横になっているようだった。
人間と同じ姿なのに、不思議な光景である。
未来はじゃんぐるちほーを出て、さばんなちほーへと足を踏み入れた。
さっきまで居たじゃんぐるちほーは二、三歩戻ればすぐの位置にあるのに、環境が全然違った。
空気も温度も、もちろん見た目もだ。
一面広がる大地を歩いて、さっき見た木へと向かう。
高低差が全くなく、先が見えているせいか普通より時間がかかった気がした。
が、そんなことを考えながら歩いているうちにいつの間にか木の下へ着いたのだった。
サーバルは相変わらず木の上で昼寝をしている。
起こすのも悪い思い、未来は木陰で少し休憩を取ることにしたのだった。

やがてサーバルが耳を立て、ひょいと木の上から降りてきた。
「はじめまして！私はサーバルキャットのサーバルだよ！よろしくね！」
そういうとサーバルは、続けて私に質問をしてきた。
「ところで・・・　あなたは何のフレンズ？」

第十話

唐突な、一風変わった質問に未来は一瞬反応が遅れる。
「えっ」と戸惑ってから「・・・人間(ヒト)かな・・？」と控えめな口調で答えた。
するとサーバルは「そーなんだー！ヒトちゃんじゃ何かおかしいしなぁ・・・ミライちゃんって呼んでもいい？」
そう聞かれると未来は、「うん！」と元気よく答えた。
暫くの間サーバルと談笑し、時計を見れば時刻は午後６時を過ぎていた。
サーバルに別れを告げ、未来はじゃんぐるちほーへと戻っていく。
暫くすると、先ほどバスを降りた場所が見えてきた。
さばんなちほーとじゃんぐるちほーの境界である。
「バスを降りた場所・・・」
ラッキービーストと未来はバスを降りた場所をじっと見つめていた。
・・・・・・

「「バスがない」」
さっきまで大きなバスがあった場所には、何も無くなっていた。
ラッキービーストを見れば、お察しの通り検索中と言いながら円を描いて走っている。
そしてその後、いつも通りフリーズした。
未来は即座に端末を取り出し、本部へと電話をかけるのだった。
１コール、２コール。
そして３コール目で相手が受話器を取る音がした。
未来が「もしもし」と言おうとしたその時、やけにきらびやかな音と共に端末の電源は切れた。
もう一度電源を入れ直そうと試みるも、電源ボタンを押して出てくるのは要充電マークばかり。
ここは超広大な島、ジャパリパーク。

地図も、明かりも、頼りも無しに出歩くのは危険すぎる。
それはこれからガイドとなる未来が一番分かっている事だった。
しかし、行動しないことには始まらない。
未来は覚えている限り、バスが通ってきた道を引き返すことにしたのだった。
街灯はあるが、オープン前であるが故に明かりを一切灯してくれない。
月明りだけが頼りの森の道を未来はゆっくりと進んでいくのだった。
未来が覚えている限り、バスは殆ど直進してきた。
しかし、何回か曲がった覚えもある。
今のところは一本道が続くばかりで、歩みに迷いはなかった。
暫く歩くと、未来は改めてパークの広さを思い知らされる。
明かりもない、バスもないパークは朝よりももっともっと広く感じた。
それから３０分程するとパークの上には雨雲がかかり、やがて大雨が降ってきた。
未来もそれに気づき、走って雨宿りができる場所を探す。
そして見つけたのはジャパリバスの停留所だった。
風を凌ぐ事はできないが、屋根とベンチが付いているだけで十分に体を休めることができた。
未来はベンチに横になり、防寒用のジャケットを着て眠りに着くのだった。

一方そのころ本部では、未来を除く殆どの従業員が従業員棟に戻り、各自の自室で休息を取っていた。
そして、未来だけが居ないことに気づいた新良は、急いで他の運営スタッフに連絡を入れる。
すると従業員棟からは数台の車が出庫し、それぞれ別方向へと走って行ったのだった。
新良はそれを見送ってから、自分も残りのスタッフと共に車へ乗り

込んで走り出すのだった。
２０分程して、従業員棟から送り出された車の一台が未来が居る停留所の前を通った。
が、道は暗く未来は睡眠に入っていたため、どちらも気づかず車はさらに奥へと走り去ってしまった。
遅れて出発した新良の元に、各車から無線連絡が入る。
しかしどれも、見つからないという内容のものだった。
新良は続けて探すよう命じ、自らの車を加速させた。
やがて未来が起きると、天候はさらに悪化しており雷までなっている程だった。
未来が様子を見るために停留所から出ると、横の木陰から何かが隠れたような「ガサッ」と言う音がした。
時間も時間で、天候も天候。
さらには光もない真っ暗闇の森。
そんな中でこんな音を聞いた未来は、少しビビりながらもその音がした方へ近づいていくのだった。

第十一話

未来が木に近づくと、木陰から何かがジャンプして飛び出てきた。
とっさに未来は、その物体が飛んだ方向へと体を向ける。
そこにいたのはサーバルだった。
「サーバルちゃん?!」
未来が驚いているとサーバルは照れたような顔をして、「面白そうだったから、付いて行こうかなー、と思って！」と説明した。
それを聞いて未来はホっとした表情を見せて、サーバルを連れて再び停留所のベンチへと腰を下ろした。
暫くすると、道の奥の方から二つの光が近づいてくるのが見えてきた。
サーバルは若干ゃ怯えた表情を見せて未来の後ろへと隠れた。
やがてその光は停留所の前で止まり、車だという事がやっと分かった。
それでもサーバルは隠れたままで、未来にずっとしがみついている。
やがて車のドアが開き、中から人が出てきた。新良だ。
新良は未来とサーバルを見つけ、停留所に歩いてきて未来に話しかけた。
「大丈夫だったか?!未来さんにサーバル・・・ 一体どうしたんだ!?」
切羽詰まった様な口調で新良は話した。
未来は「すみません!!ラッキービーストの調子が悪くて・・・ バスが無くなってて、端末の充電は切れてしまって・・・ 雨が降ってきて・・・」
それを聞くと新良は全てを理解したようにため息をついて口調を改めて話しだした。
「大変だったね、お疲れ様。また明日は早い、さあ車に乗って。サーバルは・・・ 今日は暗いし雨も降ってる。今日は一旦一緒に従業員棟に行こうか」
それに対して未来は「わかりました」と答え、サーバルは「はーい！」と元気よく答えた。

二人が車に乗ったことを確認してから新良は車を従業員棟へと走らせた。
やがて車は従業員棟へと到着し、未来とサーバルはそれぞれの部屋へと案内された。
未来が椅子に座り、今日は疲れたなぁと精一杯伸びをしていると、コンコンとノックの音が聞こえた。
未来は「どうぞ。」とその客人を部屋に招き入れた。
すると入ってきたのはサーバルだった。
サーバルは「夜ご飯、一緒に食べよう?・私おなかすいちゃったぁ～!」
と、バスケットに入れられたじゃぱりまんを持ってきた。
じゃぱりまんはフレンズの主食となる食べ物で、各個体向けに栄養バランスが考えられたまんじゅうの様な形の食べ物。
もちろん人間が食べても安全な上、凄く美味しいとしてパーク内での販売が人間向けに予定されている程だ。
未来は笑みを浮かべ「ありがとう」と言って、事務椅子から二人掛けのソファへと移動してじゃぱりまんを一つ取った。
サーバルも同じくじゃぱりまんを一個取って、二人同時に一口食べた。
「美味しい!・」
二人の声が重なり、思わず顔を見合わせる。
そしてまた、笑いあうのだった。
じゃぱりまんを食べ終えて、二人とも「お腹一杯」という表情で、ソファにダラーともたれかかった。
するとサーバルが思い出したように立ち上がり、未来に話しかける。
「私たち、これからずーっと一緒だよ!・よろしくね!・」
そういうとサーバルは、手を差し出して未来を見つめた。
未来は「うん!」と笑顔で返事をしてその手を取り、優しく握ったのだった。

第十二話「おーぷん」

それから時は過ぎ、辛くも楽しくもあった研修は終わりいよいよジャパリパークはオープンの日を迎えた。
フレンズは皆、定位置でそれぞれくつろいでいる。
従業員もまた、起床時間である午前６時を迎えた後は各自それぞれ自由行動をとっていた。
オープンは午前十時、後約三時間後である。
従業員服に着替え、朝食を軽くとった未来は自室の机の引き出しを開け、紙を取り出す。
オープンセレモニーでの挨拶原稿だ。
未来はそれを取り出すと一人でぼそぼそと何度も声に出して読んだ。
やがて、部屋に新良が入ってくると未来はそちらを見て「こんにちは」と一礼をした。
新良も軽く礼を返すと「そろそろ時間です」とドアを開けて誘導する仕草を見せた。
未来はそれに従い、部屋を出て新良に付いていった。
案内された先は、お客さんが乗ってくる船が泊まる停泊所の前に設置された特別ステージ。
前にはマイクが置かれ、その後ろでは一部のフレンズや、多くの従業員が待機していた。
未来はマイクの前に立ち、何度か暗記した原稿を脳内で喋ってみたりした。
暫くすると会場内に新良の声が響き、「もうすぐ船が来る」とのアナウンスがされた。
それと同時に未来をはじめとする大抵の従業員はステージ裏に下がり、誘導役の従業員がお客さんが船から出てくる入口まで走っていった。
そして、やがて遠くから見えてくる超巨大客船「ジャパリ号」定員は５０００人ほどで、一日に本土とジャパリパークを三往復する。

これでは全然人が入れないとじゃないか、思うかもしれないが、四日後には本土とジャパリパークを結ぶ海上道路が完成するので心配することは無い。

今日はあくまでも抽選で選ばれた１００００人のみの先行入園なのだから。

そうこうしている内に船は目の前に停泊し、その大きさを改めて再確認することができた。

華々しく彩られた出入り口からは続々と人が出てくる。

一番最初に出てきたのはファミリーで、何やら記念商品を渡されているようだった。

お客さんは係員に誘導され、ステージ前に敷き詰められたイスに腰を掛ける。

全員が座るまでにかなり時間がかかった。

そして新良の声が再び会場内に響く。

フレンズによる園の説明や、ジャパリパークのテーマソングである「ようこそジャパリパークへ」の合唱など様々な発表が行われた。

反応は良好で、発表が終わるたびに盛大な拍手が沸き起こった。

そして次はいよいよ未来の挨拶だ。

未来は新良に呼ばれると、少しづつ歩みを進め、マイクの前へと立ち、一礼した。

「初めまして。ご紹介にあずかりました未来と申します。早速ですが、私の夢についてお話させて頂きたいと思います。私の家の近くには動物園があり、学校帰りに動物園へ行ってスケッチを取るのが日常の一部となっていました。そんな当時の私が目指したのは動物園の職員です。それから毎日勉強をして、この動物園で働くことを目標としていました。そして私は、念願のこの動物園で働けることが決まったのです。夢が、叶ったのです。この動物園は普通とはちょっと違いますが、フレンズのみんなも勿論動物のみんなも・・・ 私の大事な友達(フレンズ)です！私の夢は叶いましたが、今は別の夢があります。それはお客さんもフレンズも動物も従業員も、姿形は十人十色、それでもみんなが共通して楽しいと思える動物園を創ることです！みなさん、これから

どうぞよろしくお願いします!!!」
未来がそう言って礼をすると今までにないほどの拍手が送られた。
未来はステージの去り際に、もう一度礼をした。
そしてステージ裏で元の原稿を取り出す。そこに書いてあったのは今の挨拶と全く別の内容であった。
つまり今の挨拶はアドリブであり、未来の心の底から出た気持ちだった。
未来は原稿をしまうと、これから本格的に始まるジャパリパークでの人生に対しての決意を心で誓った。

第十三話「ふおん」

開園セレモニーが終わると、お客さんたちは係員に誘導され入園ゲートへと向かう。

いよいよ従業員以外誰も入ることのなかった園内に初めてお客さんが入るのだ。

スタッフの初々しい対応のおかげで、若干対応は遅れてしまっていたが、誰一人文句を言うお客さんは居なかった。

ゲート前に続く長い長い行列は時が経つにつれ徐々に短くなっていき、一時間もすると列は殆ど解消されていた。

それを確認した未来たちはその場を担当の従業員に任せ、従業員棟に戻ることにした。

その途中、未来の肩を新良が「ポン」と叩き、「さっきの挨拶、凄く良かったよ」と言った。「ありがとうございます!!」と未来が言うと新良は笑顔を見せてその場を去っていった。未来も続いて従業員棟に向かうために、歩き始めた。

未来は自室に戻り、パソコンを立ち上げてジャパリパークのホームページを開いた。

ブログページを開くと、記事は早速更新されていた。

タイトルは「ジャパリパーク開園!」写真には、挨拶をしている自分が写っていた。

それを眺めて達成感に浸っているうちに、未来は強烈な睡魔に襲われて眠りに着いてしまった。

昨晩挨拶原稿を考えて徹夜してしまったのが原因だろう。

未来がデスクにもたれかかり、眠っていると備え付けられた固定電話が大きな音を立てる。

驚いて起きた未来は重い目をこすりつつ受話器を取った。

相手はお客様相談室、室長の飯田と名乗った。

お客様相談室は、ジャパリパークへの様々な問い合わせの対応を主な仕事とする係である。

未来が「どうされましたか?」と問うと、飯田は「実は・・・ちょっ

と気になる問い合わせがありまして・・・ もしかしたらイタズラかもしれませんが・・・」
飯田は気まずそうに切り出した。それに対し未来は「なんでしょう？」と返す。
飯田は「はい、先ほど相談室に園内の方から問い合わせがありまして・・・ 人の形をしていなくてフレンズでもない、何か奇妙な形をした青い生き物の様なモノを目撃したとの事で。実害は無かったそうですが、一つ目で凄く怖い思いをしたとの事で・・・ 嘘っぽい話ではありますが、一応確認をお願いしたいのです。場所は端末の方に送っておきます。お願いできますでしょうか？」それに対して未来は「分かりました。」と返事をして電話を切った。
オープン直後のイタズラ電話や嘘の報告はよくあることだが、もしもの事を考えた場合、一応見ておいたほうが良いと未来は考えたのだ。
未来は端末を取り出し、送られてきた住所を確認するとすぐさま手が空いている園内の職員に事の内容を説明し、付近を調査するよう命じた。
未来自身も一体のラッキービーストを連れ、車に乗り込んだ。
暫くして現場前の道路に到着すると、そこには従業員が乗ってきたであろう自転車と車が止まっていた。
未来も車を止めて、ラッキービーストと共に車から降りた。
目撃情報のあった場所にまずは向かった。
そこは道路から少し外れた場所で、ちょっと薄暗い場所だった。
未来はその近辺をラッキービーストと歩き回ったが、結局何も見つからなかった。
調査を命じた従業員からも「異常なし」という内容のメールが続々と送られてきた。
未来も調査をやめ、車に戻ろうと道路へと歩き始めた。
その道中、何もなくとも新良の耳には入れておこうと考え、電話を掛けた。
３コール目で新良は電話に出る。「もしもし」と電話が繋がってい

ることを確認してから未来は新良に今までの経緯を全て説明した。
すると新良は少し深刻そうな口調で「一応・・・ カコ博士の元へ行ってこの報告をしてきてくれないかい？」と言った。
カコ博士はジャパリパーク動物研究所の副所長さんで、名前だけは知っていた。
未来は多少戸惑いながらも「分かりました。」と返し、電話を切った。
そして道路へと再び歩き始めた。
後ろの木陰からは、大きな目が未来を見つめていたのだった。

第十四話「けんきゅうじょ」

未来は新良に電話で伝えられたカコさんに会うために、ジャパリパーク動物研究所へと足を進めていた。
謎の生き物の目撃情報があった場所からはそう遠くなく、車を使えば5分程度で着く場所にあった。
未来はラッキービーストを抱え上げ、ドアを開けて助手席に座らせた。未来もまた、運転席に座ってドアを閉めてエンジンをかけた。
車は快調に走りだし、Y字の分岐点に差し掛かった。
その途端ラッキービーストは「ミギダヨ」と言った。しかし未来は迷わずハンドルを左に切った。
さっき、端末で地図を見たときに研究所は左にあることを確認していたのだ。
ラッキービーストはいつもの通りフリーズしている。危ない、もし端末を確認していなくてラッキービーストに従っていたら今頃道に迷って大冒険が始まっていただろう。
そして、暫くすると車は「ジャパリパーク動物研究所」と書かれた看板の前に到着した。
未来はそこに車を止めると、研究所の扉へと向かった。
目の前に聳え立つ大きな建物、息をのんで未来は扉を二回ノックした！
中からは「どうぞ～！」の声。以外に気さくそうで未来は一安心して、中に入った。
そこに居たのは深緑と紺色が混ざったような毛色をしたロングヘアーの白衣の女性。年は未来と同じくらいに見えた。
未来が「初めまして！未来と申します!!」言うとカコは「初めまして、ここの副所長をしているカコよ。」と自己紹介した。
ミライ（未来）は今まで起こったことの全ての経緯をカコに話した。
するとカコは少し考えるような仕草と表情を見せてから話し出した。
「実は・・・・ その目撃情報と酷似した、或いは同じような目撃情報が

パーク開演前からいくつか寄せられてるの。この研究所でもその謎の生物に対する研究は進められてきたんだけど・・・ まだまだ分からないことの方が多いのが現状なの。それでも分かってきた事はいくつかあるの。ミライさん、サンドスターって知ってる？」

ミライはこの島に来て一番最初にホールで行われた説明会での新良の発言を思い起こした。

そして、「はい、一応は・・・」と答えた。

するとカコは「そう。あの山から不定期に噴出される謎の物質よ。このサンドスターのおかげで新しいフレンズが生み出されたり、各地域の気候が調整されていたりしているの。つまりコレがジャパリパークの要とも言えるわね。だけどね、サンドスターが噴出した翌日には必ず謎の現象が起きるの。」

それを聞くと未来は「謎の現象・・・ ？」と尋ねた。

するとカコは話を続ける。

「サンドスターが噴出した翌日には必ずフレンズが一体以上居なくなる。そして稀にではあるけれど居なくなったフレンズの元の姿、つまり動物が普通居るはずのない場所で目撃されているの。そして、謎の現象はもう一つ。今回と同じ、謎の生物が現れること。しかもこの生物は、噴出が起きるたびに目撃情報が増えていってる。つまり、噴出するたびにフレンズではない何かがサンドスターによって生み出されているって事ね。そしてこの謎の生物はフレンズを捕食している可能性が高いということ。私たち研究員は、その目撃情報で寄せられた個体の色から名前をとってこの謎の生物をｃｅｒｕｌｅａｎ（セルリアン）と呼んでいるわ。」

ミライはこれを聞いて呆気に取られてしまった。

ジャパリパークが成り立っている上でとても重要なサンドスターが、まさかフレンズの天敵となる生物を創り出しているとは、と思ったのだ。

と同時に、目撃情報があった場所から道路に戻る際に妙に感じた視線に身震いをする。

暫く沈黙が続いてからカコが話し出す。

「また何か進展があったら連絡するわ。貴重な情報ありがとう。」と言った。

ミライは「はい！お願いします！」と伝えて扉を開けた。

扉の向こうで手を振って見送ってくれているカコに手を振り返して、ミライは研究所を後にした。